Japanese Association for Religious Studies

に現世利益といえるだろう。そして圭室は『葬式仏教』において、日本仏教はまず治療・招福の仏教として定着していき、最後に葬祭仏教が民衆に定着していったと認識している。同様に中村元においても日本の初期仏教を現世利益的と規定しており、その視点は現世利益をもって日本仏教の基底としている点において共通したものである。

二点として仏教者による現世利益理解を指摘したが、藤井正雄の言によれば、仏教学の立場からは、少なくとも仏道修行の結果として現世利益は認められるが、利益を受けることを目的化することは認めていないということになる。しかしながら仏教者はそのような教義と民衆の現世利益的欲求の隘路で、現世利益を反仏教的として否定する視座と民衆を仏法に導く方便として肯定的に捉える視座の二つの選択肢をたどったとみている。この二つの選択肢の間において、現世利益は民衆の生活欲求の一形態と捉えられてきた。この仏教学の消極姿勢に対して五来重は痛烈に批判し、民衆の仏教こそ真の仏教という観点から、現世利益信仰は五来が体系化する「仏教民俗学」に位置づけられていく。

次に宮田登、イアン・リーダーの言説をもとに民俗宗教論における現世利益理解を論じた。宮田の現世利益理解は、辻善之助によって提唱された近世仏教＝仏教堕落論という仏教の語り方から距離を置き、民衆の中に息づいている仏教を「生きた仏教」としてとらえる視座に接続されているといえる。同様の視座は「民衆の中の仏教」に関心を持つ宗教学者にも共有されているものであり、イアン・リーダーにおいても、教義的な仏教と比較され、不当な地位にあったとする現世利益信仰を取り巻く研究状況を踏まえつつ、現世利益信仰が民衆の宗教行動や思考の主なる問題になることを示唆しているのである。

最後に、このような現世利益信仰理解の転換になったのは、一九七〇年に発刊された日本仏教研究会編『日本宗教の現世利益』であったとし、当時の新宗教の隆盛のなか、その原動力は現世利益にあるという認識があり、翻っては仏教と現世利益の関係を多角的に問う試みではなかったかと考察した。そしてそのような試みから、個別の論説間には相違があるものの、旧来の消極的で二律背反的な現世利益理解から、民衆と宗教の関係を肯定的に位置付け、対立構造から相互作用へと転換された現世利益理解が共通化していったといえる。『日本宗教の現世利益』は、そのような現世利益理解転換のための孵化器のような役割を果たしたのである。

よさこい系祭りの組織的特徴

芳賀　学

一九八〇年代以降の日本社会においては、主として、都市化（郊外化）と共同体の解体によって、伝統的な多くの祭りが衰退する一方で、阿波踊り・サンバ・郡上踊りなどの祭りは、従来行われていた地域から日本各地へと伝播拡大する傾向にある。本報告においては、こうした祭りの中でももっとも広範に拡大している「よさこい系祭り」を取り上げる。「よさこい系祭り」とは、一九五四年に高知市で生まれた「よさこい祭り」に起源をもつ祝祭群の総称である。この種の祭りは、四〇年近

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

くの間、ほぼ高知固有であったが、九二年に札幌に伝播し、「YOSAKOIソーラン祭り」として大成功して以降、全国に急速に拡大し、現在二百箇所以上に達するといわれている。この「よさこい系祭り」に関しては、指定された楽曲の一節を含む伴奏に合わせて鳴子を手に持って踊ること以外に、一切しばりのない自由度の高さやそれゆえの可変性が従来注目されてきたが、ここで焦点を当てるのはその組織的特徴である。

この点を考える上で重要であるのが、松平誠が一九八〇年代に東京「高円寺阿波おどり」を調査して提出した、「合衆型祝祭」という概念である。彼は、その著書『都市祝祭の社会学』の中で、町内という地域共同体を基盤とする伝統的な祝祭に対して、「日常的な生活諸縁から脱出した個人の集まりである『衆』、あるいは自由で一時的な仲間としての『党』」が担い手となって行われる「一見無秩序とも見える開放的な祝祭行為」をこう呼び表した。そして、その特徴として、さらに、①地縁・血縁・階層帰属などの制約が薄い、②家族単位ではなく、個人単位の構成、③メンバーの居住地域が広域に及ぶ、④メンバーの加入と離脱に関する流動性が高い、といった傾向を挙げている。これらの傾向は、現代の「よさこい系祭り」のチームにも当てはまるものばかりであるだけではなく、その適合度は八〇年代の「高円寺阿波おどり」よりも明らかに高まっている。こうした傾向は、他の祭りの動向と一致するだけでなく、現代新宗教に特徴的な組織形態とも符合するがゆえに、より一般的な適用の可能性があると思われる。

ここまで述べた点は、祭り集団（チーム）と参加者（踊り子）との関係がより自由度を増していることを示しているが、「よさこい系祭り」からみえる祝祭の変化はそれだけではない。もうひとつの重要な点は、祭り集団と祭り主催者との関係である。町内等の地域共同体に支えられていたかつての祭りでは、祭り集団は、祭り主催者に帰属する下位集団であった。いいかえれば、祭り集団とは、祭りを主催実行する地域の一部（地区＝町内）を単位とするものだったのである。それゆえ、祭り集団のパフォーマンスも、基本的に帰属する祭りの中で発揮されるべきものであった。しかし、「よさこい系祭り」のチームでは、様相は一変している。この種のチームでは、いくつもの祭りやイベントに参加して、一年間に何度も演舞するのが一般的な姿である。中には、どこがホームとする祭りかが判然としないグループさえある。参加する祭りやイベントは、近距離の場合が多いものの、真冬を除く年中、二大聖地とされる高知・札幌など、全国を股にかけて移動するチームもある。祭り主催者の側も、地元のチームとともに、参加費等の義務を課した上で、外部のチームを積極的に受け入れる傾向があり、結果として参加チームの過半数（極端な場合にはほとんど）が外部のチームによって占められる祭りも珍しくない。つまり、この種の祭りにおいては、祭り集団と参加者だけではなく、祭り主催者と祭り集団の関係も大幅に自由度を増しており、祭り主催者・祭り集団・参加者という三者からなる祝祭の組織的構造自体が新しいものへと変化しているのである。

NII-Electronic Library Service